

# 中国の古典書における家庭教育の社会学的要素について

翁 麗霞\*・神川 康子

## A Study of Sociological Elements in Family Education through Chinese Classic Books

LiXia WENG, Yasuko KAMIKAWA

### Abstract

Family education is a both new and old topic. A lot of studies have been conducted by scholars at home and abroad. The sociological thought originates from modern times, but it doesn't mean there was no sociological thought before. In fact, it emerged in ancient times, long before we realized it. The paper studies ancient Chinese family education in different stages from the perspective of sociological thought, which aims to draw inspirations from family education in ancient China.

キーワード：古代家庭教育，社会学的要素，古典書，中国

keywords：Ancient family education, Sociological elements, classic books, China

### I. はじめに

家庭教育は古代から現代に至るまで取り上げられているテーマである。この主題をめぐる、中国の内外の学者による多方面にわたる研究が行われている。勿論、社会学的発想は近代に始まるものであるが、実際、社会学思想は中国古代においても歴然と存在していたのである。本論は中国における古代家庭教育系統の考察を基礎とし、中国の家庭教育における社会学思想の発生、繁栄、発展の各時期を分析、研究し、説明を加え、今日の中国社会学的視野の下にある家庭教育に対して、有益な啓発が提供できることを望むものである。

中国の古代社会において、国家は家庭モデルの拡大であるといえる。古代の家庭のこのような地位は直接国家の存亡や社会の盛衰にまで関係してくる。家庭、家族は社会の基本的な経済単位であり、また社会的・政治的に安定した末端行政組織を保つ役割も果たしている。そしてまた、社会構成員としての個人の意識の仲介メカニズムとしての国家または、社会的イデオロギーの転化だけでなく、社会教化の基本単位でもある。

中国は文明大国であると同時に家庭教育の古国でもある。長い間中国国民は、家庭、家族及び子女教育をきわめて重視してきた。この家庭教育に関す

る問題は数多くの中国の思想家、教育家、文人、学者が自らの作品で、すでに言及している。勿論、彼らの視点はそれぞれ異なり、社会形態に基づいて区別しているものや、家庭教育自身の発展に基づいて区別しているもの、伝統的家訓の発展によって区別しているもの、家訓を基準として区別しているものなどがある。

古代にはまた、近代家庭教育の著作物に紹介されている社会形態による区別として、奴隷社会的家庭教育、封建社会的家庭教育等がある。<sup>(1)</sup> 更には家庭教育の発展により区別すると、春秋戦国時代、両漢魏晋南北朝時代、宋時代、明朝時代に分けることができる。<sup>(2)</sup> 伝統的家訓の発展により区別すると、中国の古代家庭教育の区別は前秦～両漢時代、三国南北朝～隋唐時代、宋元明清時代と認識される。<sup>(3)</sup> 家訓を基準として区別を行なうと家訓の発生は西周には始まり、隋唐に成熟期をむかえ、明清に完全なものとなったと考えられる。<sup>(4)</sup>

各人の伝統的家庭教育に対する見解はそれぞれ異なるが、大体において中国の古代の社会学思想によって、家庭教育思想のあらましを垣間見ることができる。中国歴代の家訓は、終始、封建的道德を主要内容としていた。例えば、家庭教育において、忠・孝・和・仁・義・廉・潔・恥などの内容が特に際立っており、儒家の道徳理論はすでに家庭教育の核心となっていたといえる。

\*中国寧波工程学院副教授

## II. 中国の古代的家庭教育における社会学思想の発生時期

古代中国の家庭教育は社会学思想的家庭教育を持っていた。その発端は古いが、家庭教育思想の発生、および社会学思想の発生を認めることができる。現存する記載によると家訓は西周初年の姜太公、周公旦にまで遡及することができる。「家訓」とは古代家庭教育の読本の総称である。また、「家訓」という言葉も著者によりそれぞれ異なった名称が用いられている。例えば、「家誠」「家規家教」「家範」「宗範」「世範」などである。<sup>(5)</sup>『論語・微子』と『周易』は、中国の古典書の中では家庭教育に関する最も古い記載である。

『管子・小匡』には「令夫士群萃而州处，闲燕，则父与父言义，子与子言笑，其事君者言敬，长者言爱，幼者言弟。」とある。<sup>(6)</sup>この時期の家訓の多数には、ある一側面から子供に訓戒を行っていることに特徴がある。家庭教育の理論的見解に関しては、思想家、教育家、文学家の著作の中に見ることができる。同時期の家庭教育に関する書籍としては、『大戴礼記』『礼記』などもある。

最近の社会学は統合及び統計分析の角度から社会現象を研究することを主張しており、社会的良性運行を強調している。中国の古人は、社会学のこのような社会と国家の対処、国家と個人の関係などの特有の視角をはっきりと持っていなかったにもかかわらず、彼らはすでに素朴な社会学思想を持っていた。彼らは、家庭教育が国家そして社会の未来の発展において重大な効用を発揮している事を知っており、彼らが追求したものは「修身（人格を磨き修養を積むこと）・齐家（家庭を整えること）・治国（国を治めること）・平天下（天下を鎮めること）」の理想人格である。

『管子』では平民の家庭教育を専門に述べており、その後の『論語』『左伝』『韓非子』『戦国策』『新書』『列女伝』等すべての家庭教育の歴史的背景が記載、論述されている。彼らは一般に家庭教育を比喩として用いて、自己の政治的観点と主張を表現、説明している。『列女伝』等は家庭教育の通俗的な読み物である。『左伝』の中にもそれに関する一節がある。この時期の家庭教育の記載から比較的雑多で分散してはいるものの、中国の家庭教育の社会学思想はすでに発生していたと見ることができる。

## III. 中国の古代家庭教育における社会学思想の発展の第一期（春秋両漢）

この時期は、耕作手段と栽培技術が比較的迅速に普及し、それゆえ比較的早期に速いスピードで地主一小農経済への転化が実現した。

家庭教育方面において有名な家庭教育の物語、模範事例の史籍記載がある。例えば『論語』の孔子が息子孔鯉に家訓教育を行う内容を記した一説によれば、孔子は息子に詩、礼などを学ばせている。この時期、中国の家庭教育に関する記載が見られる書籍は管仲の『管子』、孟軻の『孟子』を除き、さらに韓嬰の『韓詩外伝』、韓非の『韓非子』などがある。

社会化は人々の交流活動によって実現するものであり、児童は両親、親族、隣近所、同級生との交際の中で、最初の道德水準と行為規範を得る。中国の古代家庭教育は疑いなく「素朴」な社会学の家庭教育思想を生み出したといえる。

社会学が強調している個人の社会化は社会の中で行われるものとしており、家庭と社会は緊密に結びついている。また個人は必ず社会と相互作用を行わなければならない。家庭は子供の出生、成長の揺りかごであり、且つ、重要な教育の場である。家庭は子供の第一の学校ではあるが、ここと同時か、若しくは家庭を通して、子供達は社会や仲間達と交際を広げていかなければならない。社会環境や回りの仲間の言葉や行動は子供の品性の形成にきわめて重要な役割を及ぼす。家庭教育の過程は、実際、家長と子供はそれを運用し、互いに影響を与える過程でもある。<sup>(7)</sup>

交際を慎むことは、歴代家訓において重要な課題であった。『女伝・母儀伝』に孟母三遷の物語があるが、そこから孟母が児童教育環境の重要性を理解しているということがわかる。人と初めて接する児童たちは非・善・悪の区別をつける能力を持たない。同様に彼らは強烈な好奇心に駆り立てられ、盲目的に他人の言行をまねる。このように、社会習俗やまわりの人間の品性が児童の癖や生活態度、品性の形成にすべて深く関わってくる。

「孟母三遷」は最終的に学官の近くに家を落ち着けることを選んでいる。彼女は苦心に苦心を重ね、住まいをにぎやかな商業都市から学官近くに移す。孟子はこれによりやっと礼を学び始める。孟母はこの状況を見て、非常に喜んで「此真吾儿之所居也」

という。この物語を通し、孟母が子供への外界的環境の影響を重視していることを知ることができるし、中国古代の素朴な社会学思想の表現を含んでいることを窺い知ることができる。古人は人の成長に関する社会化理論を示す社会学を理解していなかったにも関わらず、彼らはすでに人と外界環境の道理を知っており、中国古代の素朴な社会学的家庭教育思想を発展させたのである。

この時期は家訓、家戒を以って、子女に対する家庭教育の方式とした。劉邦の『手教太子』、司馬談の『命子遷』、東方朔の『戒子』、劉向の『戒子歆書』、馬援の『戒兄子言、敦書』、鄭玄の『誡子益恩書』、察邑の『女戒』、孔蔵の『与子琳書』、樊宏の『誡子』などの主要な著述がある。

一部の初歩的家庭教育思想が形成されはじめる。『左伝・隠公三年』の教育内容論や『荀子・大略』の教育方法論、『荀子・勸学』の環境影響論、総括及び早期教育の胎教理論等である。このように環境を重視することは、中国古代の素朴な社会学思想の家庭教育に対し影響する思想を生み出し、古代の社会学思想による家庭思想を形成する上で、人の社会化理論が芽生えることに貢献したといえる。

この時期の家庭教育の主要な部分は個人的な家庭教育の経験の統合であるとも言われているが、それはまだ全くもって不完全であり、全く系統的ではないといえるが、中国における以後の家庭教育発展のために、堅固な基礎を定めることができる。

#### IV. 中国の古代家庭教育における社会学思想の発展の繁栄期（三国隋唐）

(1) 南北大運河の開通、半世紀の安定した発展は、中国伝統社会を隆盛期に到達させた。この時代の素朴な社会学思想による家庭教育思想の家訓に関する書籍は激増し、範囲も多方面にわたった。ほとんどそれは、修身・立志・家教・徳行・処世・勉学・尊師・理財・致用など各方面にまでわたった。例えば、曹操の『戒子植』、向朗の『遺言誡子』、王祥の『訓子孫遺令』、王修の『誡子書』、陶淵明の『与子俨等疏』、源賀の『遺令教諸子』、楊春の『誡子孫』、元稹の『悔侄等書』などである。そのうち諸葛亮の『誡子』、班昭の『女誡』、唐太宗の『帝範』等はそれらのうちでは逸作品に入る。『女誡』七篇は女子は人に対し謙虚で穏やかであ

るべきで、進・敬・順を以って主とするべきだと要求している。例えば、『婦行』に「女有四行、一曰婦徳、二曰婦言、三曰婦容、四曰婦功。夫云婦徳不必才明絶异也。婦言、不必辯口利辞也。婦容、不必顔色美丽也。婦功、不必技巧过人也。」のような記載がある。<sup>(8)</sup> つまり、この四つの方面は女性の節操であり、一つとも欠けてはならない、というのである。

社会学は統合と系統分析的角度から社会現象を研究することを主張している。人々の社会関係と社会行為を通し社会的構成、功能、効用を研究することを主張しているのである。古代統治者たちは社会学的なこの理論を知らなかったのであるが、彼らは統治者と民衆の関係を知っていたといえる。彼らはこのような素朴な社会学思想の統合分析と系統分析を知っており、唐太宗はさらに統治者の徳行を朝代存亡にかかわる最高の地位にまで高め、その徳行を重視する教育中心論はここからを見ることができる。そのために『帝範』は王室において普遍的に重視されることになった。

(2) 家庭教育思想の理論化、系統化、その標識は北齊人顔之推の『顔氏家訓』の出現である。現存する家庭教育の著作のうち最も古い『顔氏家訓』の作者は顔之推であり、この書は七巻二十篇に渡る。顔之推は家庭教育をきわめて重視し、また環境の人の成長に対する影響を重視した。また胎教の必要性を提唱し、比較的深くまで掘り下げて家庭教育の規律を研究した。例えば『顔氏家訓勉学』：「自古明王聖帝、犹須勤学、况凡庶呼！此事便遍于経史、吾亦不能鄭重、聊举近世切要。以启瘡汝耳。」である。大意は、「古来より神聖にして英明である帝王はさらに勤勉に学ぶ必要がある、いわんや貧民平民においてをや！これらのことは経史書にあまねく記載されており、一つ一つ列挙することはできないが、近世適切で重要なものだけを挙げよう、これを以って皆に啓発することとする」。<sup>(9)</sup>

顔之推の書籍では家庭教育の内容、原則、特殊作用が論述されている。中国が持つ社会学思想の家庭教育思想において、顔之推は初めて父母子女関係の角度から家庭教育の特殊作用を論述した人物である。すなわち、彼は社会学的視角を以って父母子女の役目から家庭教育の特殊作用を論述した人物なのである。

『顔氏家訓・教子』の観点では、生まれつき素質の有る者は教育を受けなくとも有用な人材になり、愚かな者は教育を受けたところで何の役にも立たない、一般人は教育を受けなければ知識も身につかない。

『顔氏家訓・兄弟』では、年長者、年幼者の関係を論じる時、年幼者には順序があることを強調している。目上の者は目下の者を気にかけて、目下の者は目下としての身分をわきまえることを道とすべきである、それと同時に目上の者は目下の者を気にかけて、愛護し、扶養すべきで、目下の者は目上の者を尊敬し、孝行し、かしづくべきであるとしている。歴史上、「父慈子孝」に関する記載は次第に多くなっていくのである。

## V. 中国の古代家庭教育における社会学思想の継続的発展期(宋元明清時代)

宋朝時代から、血縁共同体の宗教組織が、民間で自発的、普遍的に成立し始める。彼らは日に日に完備化、系統化し、成熟した儒教思想もしだいに家庭や宗教組織に浸透して行く中で、家訓はその繁栄時期へと入ることになる。北宋時期になると、遊牧民族が頻繁に入関し、北方は戦乱が続いた、中原では再び民族大移動が起り、それと照応して経済文化の南への移動が起こった。この時期には家訓に関する著作が急速に増え、それ以前の各階層の著作物の総数を遙かに上回った。

この時期の著述の質は高く、例えば宋代の欧陽修の『海学説』、陸遊の『放翁家訓』、明代の陸世儀の『思辨録』、龐尚鵬の『龐氏家訓』及び清代曾國藩の『曾國藩家訓』などがある。その他、司馬光の『温公家範』、朱熹の『輩学須知』、許衡の『許魯齋語録』、高攀龍の『家訓』、袁采の『袁氏世範』、焦循の『里堂家訓』、朱伯庐の『治家格言』、呉麟征の『家誠要言』、王筠の『教童子法』、崔学古の『幼訓』、張英の『聰訓齋語』、孫奇逢の『孝友堂家規』、張履祥の『訓子語』などもある。

司馬光の『温公家範』(又は『家範』)記述は中国の封建社会を比較的まとまった形で反映しており、家庭道德関係の理論的著作である。『家範』と題する書は「治家」と「治国」の関係から家庭教育の社会的意義を論述しているのみでなく、家庭教育の原則的な方法を具体的に論述しており、また家庭に

おいて異なった地位にある、異なった家族の構成員と子孫の関係に対して、それぞれ異なった要求を提起している。

宋元明清時代は中国の古代が持つ社会学思想の家庭教育の継続的発展時期である。なぜなら、『温公家範』の出現により、中国古人は統合と系統的・分析的角度から社会現象を研究する社会的な主張を知らなかったにもかかわらず、社会の良性運行を強調した。但し、彼らは社会と国家、国家と個人の関係などは緊密に繋がっているということは知っていた。『温公家範』に論述されている「治家」と「治国」の関係から、この書が家庭教育の社会的意義を論述したものであると指摘することができる。これは、中国古人が持つ素朴な社会的な家庭教育思想の継続発展である。

清朝時代に、私塾が比較的発展していた。それは全く学校教育には属さず、また全く家庭教育にも属していなかった。但し、その教育段階から述べれば、民間の小学校に該当して、蒙館、家塾、族学等の異なった名称を持っていた。

明清以降、家訓はさらに流行し、代表的なものとしては朱伯庐の『治家格言』があり、数多くの家訓の名言警句を集め、内容は豊かで、生活に近づけ、『孝友堂家規』は『家規』と『家規後言』の二部に分かれており、大きな特徴は孫奇逢が先人が残した誠訓を整理し手を加え、18則家規を作り、分析解釈を加え、同時に6つの古代名人学士の名言を摘録し、これを以って子弟に訓誡を与えたことである。

『孝友堂家訓』は弟子への書簡により構成されている。『孝友堂家訓』と『孝友堂家規』は家庭教育の傑作だといえる。中華民国年間の孫源江編の『格言摘要』の主要な内容は古人の治家に関する格言を抄録したものであり、『万福堂家規』はその後ろに載せられている。『万福堂家規』は中国の現代の最も系統的な家法であると言える。『万福堂家規』は現代社会の家庭内生活の立法文書であり、その中から宗法制度の基礎の上に芽生えはじめた民主的な法治国家的な意向のかすかな萌芽を発見する事ができる。

## VI. 中国の古代が持つ社会学思想の家庭教育に対する歴史的 분석

歴史家訓を見渡すと中には精華なものもあれば糟

粕なものもあり、それらははっきりと分けられているわけでは決してなく、入り混じり混同した状態にある。これはその機能と役割も二重性を持っているということを決定的にしている。

中国の伝統社会は家庭内での常なる秩序の育成と家庭を基礎にした文化建設を重視し、家庭道徳理性の自覚などを強調した。それには一つ重要な原因がある。すなわち、程頤、朱憲が代表的理学として皇帝の支持を得て以来、封建道徳の貫徹はしだいに宗教組織の保障を得、さらに家庭と家族の具体的道徳標準ないし家法規範として家族化、宗法化に転化せられ、それらに背く事は社会世論から厳しく非難されるだけでなく、家庭においても異なった形式、異なった程度の懲罰を受けることになるからである。

中国の古代家庭教育は、家庭関係と家庭道徳教育を調和する機能がある。例えば、明朝の呂坤は論述『呂新吾閨範』の中で婦人の道として「婦人者、伏于人也、溫柔卑順、乃事人之性情；純一堅貞、則持身之節操、至于四徳、犹所当之。」と記している。<sup>(10)</sup> 大意は、「女は常に他人に従属して、おとなしくやさしく人にかしずき、純然に節操を守ること節操を保全し、女子の「四徳」に対し、さらに理解を深めるべきである」である。ここには当代の女子があるべきひかえめの美德があり、愚直な忠誠心と盲目的な孝行があり、男尊女卑等の封建思想がある。これ以外に「父為子綱」等の家訓では、父母の言葉に対し、子供はその指示に従い、少しの違背もあってはならない、とされている。これらははっきりと功利的色彩の濃い封建教化思想を持っている。その主要点は伝統的な礼教を通して人の自由発展を束縛していることである。中国古代社会において親は当たり前になんでもでき、「唯我独尊」の地位にあった。

役割理論は社会学の重要な理論の一つである。社会学における意義上の「役割」は社会的地位の動態的表現であり、人の社会的地位を巡っての一連の権利と義務を指している。中国の古人はこのような役割理論は社会的地位の動態的表現であるということを知らなかったが、彼らは、女は女らしくあるべきで、女の役目はつまり夫と子供の面倒をみることに、家から出ないこと、至るところで「四徳」に基づき事を処理すべきであるということを知っていた。この思想も中国古代が持つ社会学思想萌芽の家庭教育思想の継続的発展であると言える。中国

古代の家庭教育はつまり封建時代に発生した産物である。

だから必然的に時代の刻印が押されている。その中にはいくらかの積極的要素も存在しており、それらの消極的要素は捨て去るべきものである。

家庭教育の質の高低は封建宗法社会においては家庭の安定と幸福に依拠しており、家族の盛衰は特殊な価値と意義を持っている。「修身・齐家・治国・平天下」は中国伝統文化において最も重要な内容の一つとなっている。古代家庭教育の役割と目的もこのような状況のもとで提起されている。儒家伝統思想は「君臣有義」を強調しており、さらに愛国主義教育の優良な伝統を強調している。言い換えれば、国家と個人の利益に触れるとき、個人の利益は無条件に国家の利益に従属するべきである、ということである。国家が滅亡に瀕するとき、自己の生命は考えず、国の為を命をなげることである。岳母は激励を示す方法として、岳飛が国に忠義を尽くす為、「精忠報国」と刺青をさせた物語は今なお歴史に名を残している。

当然、参考にすべきものは、歴史的階級の限界性が存在するものの、これらのことは、今の家庭教育にも意義がある。今日我々が才徳兼備な人材を育成するということに対し、これらの考えは、国家の団結、民族の独立が擁護でき、家族の団結力を強化し、社会・経済・文化の建設と発展を促進し、社会道徳などの方面を改善し、貴重な経験を与え、後世に残る功績を持っている。とりわけ、かなりの条目に「齊家教子」の優良な伝統を反映している。

中国の古代の社会学的な啓蒙思想的家庭教育の評価・調整に対して、中国古代家庭教育の家長教育はほとんど空白状態である。すなわち、北齊人顔之推が書いた中国で最も古い格式の整った『顔氏家訓』は、中国古代社会において十分に計り知れない影響を生み出したにもかかわらず、それが家長教育に対しほとんど言及されていないということである。

『顔氏家訓』は、社会の各層に触れ、作家の顔之推はことの善し悪しについて、或いは評論し、また弟子に訓戒を行っている。顔之推は、家庭教育をきわめて重視し、環境の人の成長に対する影響を重視した。また同時に胎教の必要性を提唱し、比較的深くまで家庭教育の規律を研究した。しかし、時代、生活水準、科学技術応用の制約により、彼は大脳発育に必要な飲食物や幼年学習者が必要とする最適な

刺激方式等に関する訓練内容をなおざりにせざるをえなかった。これはきわめて遺憾なことと言わざるを得ない。

その他に、中国古代の伝統社会において、家庭教育における中心的な問題点は少数の上層家庭に限られており、圧倒的多数の庶民にまで家庭教育の考えが行き渡らなかったと言う事である。

つまり中国古代の伝統社会における家庭教育は見識があり物事の道理に通じている読書人の家庭か、暮らしが豊かな官職の家に限られたのである。貧民平民はなお家族を養い糊口をしのぐ温飽（衣食が満ち足りる事）ことに置かれており、家庭教育の問題については、人々はまだ基本的に一種の自発盲目状態の中にいた。家庭は子供を産み、育てることの重要な機能を「養儿防老」「伝宗接代（代々血統を継ぐ）」「光宗耀祖（祖先の名を上げる）」「沿続香火」とした。これらの思想は、はっきりと陳腐な人生哲学を宣揚しており、封建宗法等級制度を擁護し、人々の思想を束縛していた。

## 文 献

1. 家庭教育 陳佑兰 北京大学出版社 1990. (19頁)
2. 中国幼児教育史 杜成憲, 王倫信 上海教育出版社 1998. (52-53頁)
3. 家訓輯覽 張艳国等編著 湖北教育出版社 1994. (7-12頁)
4. 中国家訓精華 謝宝耿編著 上海社会科学出版社 1997. (2頁)
5. 中国家訓名篇 趙忠心 湖北教育出版社 1997. (2頁)
6. 古今家教文萃 趙忠心 湖北教育出版社 1997. (1頁)
7. 社会学視野中的現代家庭教育 孫興春「当代青年研究」1999. (48頁)
8. 古今家教文萃 趙忠心 湖北教育出版社 1997. (18頁)
9. 中国曆代家訓大観 李曉菲, 邵宝竜等編著 大連出版社 1997. (59-62頁)
10. 中国曆代家訓大観 李曉菲, 邵宝竜等編著 大連出版社 1997. (89頁)

## 附 記

本稿は翁が執筆した『調和ある社会の中国家庭教育』をもとにして、中国の家庭教育について考察したものを日本語で論文に修正加筆したものである。本研究を進めるにあたり立命館大学の飯田哲也先生のご指導を得た。ここに記して感謝申し上げる。

(2011年10月12日受付)

(2011年12月14日受理)